

弁護士として人生観を表す



大阪弁護士会会長
山口健一さん（法学部昭和49年卒業）

今春、大阪弁護士会会長に山口健一氏（法昭49卒）が就任した（任期は1年）。本学出身者の会長就任は、20年ぶりの朗報である。山口氏は昭和49年卒業と同時に司法試験に合格、昭和52年に大阪弁護士会に登録された。今年が弁護士生活40年目になる山口さん、弁護士への突き動かしたものは何なのか、インタビューを通して迫った。

——始めに、現在のお仕事からお願います。

山口 現在、私は大阪弁護士会会長と日本弁護士連合会（日弁連）副会長を務めています。大阪では副会長からの報告を受け、重要な事項について判断をしています。東京では全国の弁護士会から報告を受け、それぞれの会の活動をどのように取りまとめるか、どうすれば活動しやすいかを考えています。具体的には弁護士が仕事をする上で困ったことや「こんな法律があったら」「この法律はこう変えた方が良さよな」という意見を聞き、実務に即した法律を研究し、提言する等の仕事をしています。また、さまざまな法律や事件、時には政治や社会のあり方につ

いての意見を発表することもあります。あるいは、えん罪が疑われる事件で、弁護士会として調査をして日弁連で支援するようなこともあります。ハセン病訴訟の支援にみられるような「差別をなくせ」という運動にも日弁連が関わっています。

——弁護士自治という制度があると聞いたんですが。

山口 弁護士は、基本的人権の擁護と社会正義を実現するという大きな目的が弁護士法で規定されています。そのため、弁護士自治が規定されています。

弁護士自治とは、弁護士会がどこからも監督や指示を受けず、独立した組織として行動できることを言います。これによって、「何が正しいのか」「何をすべきか」を誰にも指示されることなく自由に活動できるのです。これは過去の反省に基づいています。

戦前は、弁護士は国の管理下に置かれており、人権を守るための十分な活動ができませんでした。国が弁護士資格をなく奪する権利を持っていたからです。

旬の人

戦後、弁護士法により弁護士は独立した権限を得ました。ここが弁護士自治のスタートです。

——最近の弁護士会の活動について教えてください。

山口 最近では、「安保法制は憲法に違反しているのではないか」と考へ、「安保法制をなくすべきだ」と政府に訴えました。このように政府と対立することもありますが、もちろん一緒に協力することの方が多いといえます。熊本地震では政府と弁護士会が連携して、弁護士会はボランティアとして弁護士を派遣し、国は法テラスを通じて資金面の支援をしました。被災地では、被災者の法律相談を行い、罹災証明やローン猶予の制度を紹介しました。また、生活保護を受ける人の義援金が臨時収入扱いされ、生活保護の支給額を減らされていることを中止させたりしました。

——少年時代の話聞かせて下さい。

山口 私は鹿児島県薩摩川内市出身です。実家は兼業農家で、父は教師をしていました。中学校ではきのこクラブに所属し、夏休みは理科室に足繁く通っていました。もの作りも好きでした。だから将来は理系に進み電機メー

カーに入ってももの作りをしたいと思っていました。

しかし高校生の時、「将来の仕事として、研究所で研究に励むよりも、世の中や、直接人間と関わる仕事がしたい」と思うようになり、弁護士を志すようになりました。当時から社会問題への関心が高く、食卓で新聞やテレビ番組について父とよく議論を交わした思い出があります。

——どうして弁護士の道を選び、市大法学部を受験されましたか。

山口 裁判官や検察官になる事は全く考えていませんでした。もともと弱い人の味方になりたかったので弁護士を志望しました。市大の法学部を受験した理由は、当



学生時代

時の市大の司法試験合格率が京大並みだったからです。また、法学部に有名な先生がたくさんおられたこと、学費が年間1万2千円と安かったこともあります。

——学生生活の思い出をお願いします。

山口 当時の市大の印象は「ボロッチい校舎だなあ」と思っていました。冬には石炭ストーブで暖をとるほど貧窮していたので「貧乏大学」と呼ばれていました。他には、アルバイトをする人が多かったので「アルバイト大 学」と言われ、赤本にアルバイト大学と書いてあるほどでした。私もアルバイトを色々やりました。杉本町でタクシーの洗車やLPガスの注入、墓石の据え付け、ミナミのお化け屋敷のおばけ、飲食店、引越し屋、ブドウ園の手伝いなどを経験しました。大学では弓道部に入りましたが、当時は学生運動が盛んで1年以上授業がありませんでした。大学は封鎖されていました。先生によってはゼミが開講されました。ここが市大の面白いところです。私はドイツ法のゼミに所属しました。「ゼミを持っていない先生がいる」と教授会に指摘し、ドイツ法ゼミの開講をとりつけたのですが、私を含めて3

人しか集まりませんでした。そのうち2人が弁護士になりました。

しかし、アルバイトと学生運動に明け暮れていたもので4回生の時単位が4分の3も残っていました。その後、5、6回生の時、司法試験の勉強をし、単位もその時に取得したので、成績は悪くなかったと思います。当時は、ダブルスクールという考え方はありません。市大では秋から翌年の春まで毎週日曜日、司法試験に合格した先輩が答案を添削してくれる答案練習会があり、それに参加していました。

市大は本当に良い大学だったと思います。こぢんまりとした大学で、先生とのつながりが深かったです。市大が人生の転機だったとも思います。市大に来なければ弁護士になつていなかったでしょう。

——弁護士生活40年を振り返っていかがですか。

山口 この40年間はすごく楽しかったです。今でも楽しいです。弁護士を嫌になつたこともありません。良い仕事につかせてもらったという感覚です。朝まで徹夜、土日も仕事の時期もありましたが、後悔した仕事はありません。困った人が「お願いします」と訪ねて来られ、駄目な結果でも「ありがたい

「ございました」と言ってくれる。頭を下げて頼まれ、終わったら頭を下げてお礼を言われるような仕事はなかなかないです。だから、その人のために何かをしてあげたいと思うのです。

昭和60年の豊田商事事件では、全国弁護士会の事務局長を務めました。そのため大変忙しく、ほとんど深夜にしか家に帰っていませんでした。子ども達は、私がテレビに出演した時に、ブラウン管テレビの後ろをのぞきに行つて「父ちゃんおれへん」と言っていたそうです。

批判の矢面に立たされたこともあり、和歌山カレー事件の主任弁護士に就いた時です。「弁護士は金のために何でもするのか」と非難され、自宅に脅迫状が届きました。しかし、その時も「被告の言い分を誰かが代弁しなければ正しい裁判はできない」と考え、被告人の弁護を努めました。

——事件の弁護を依頼されて断ることとはありますか。

山口 ありますね。弱い者いじめの側にまわるのは嫌なので、その時は断ります。「お金をこれだけ積むから裁判をして」というような場合は絶対に断ります。「弁護士を雇っている」「弁護士に言うことを聞かす」という考え



山口弁護士一右側

方をもった依頼者も嫌ですね。

——弁護士としての誇りと自負心について教えてください。

山口 弁護士の仕事は誰にも指図されず、自分の判断でできるところが良いところだと思います。また、自分の正義感や人生観を表すことができる職業です。正義感ゆえに裁判を躊躇（ちゆうちゆう）（躊躇）（ちゆうちゆう）（躊躇）することもあります。こんな事件でこんな解決は相手にとってはつらい結果だよとか、これでは相手は困るだろうなと考えることもあり、そんなときには自分の依頼者を説得することもあります。「弱い者いじめをしたくない、いじめる側には立ちたくない」と、いつも考えています。

——法曹界の現状についてどうお考えですか。

山口 世間で言われているように「弁護士は食うに困っている」や「就職がない」という状況はほとんどありません。

法律家の志願者が減るのは大問題だと思います。なぜなら、法律は世の中の仕組みを作るうえで一つの骨格となつているからです。法曹になりたい人が減ると、職業の魅力がさらになくなつていきます。さらには、世の中をいい加減に見ている人が法律家になるなどの質の低下を招いてしまうでしょう。これは日本の社会にとってゆゆしきことだと考えています。

そんなことを市大の法学部の皆さんに訴えて、みんな法律家になろうよと訴えたいと思っています。

——大阪弁護士会で考えておられる改革はありますか。

山口 弁護士会は身近なものでありたいと考えています。依頼人と弁護士の垣根を取っ払いたいです。今年はスロージャーガンに「出かけていく弁護士・弁護士会へ」を掲げています。弁護士が、社会福祉施設・市役所・医療機関、求められれば依頼者のご自宅へも同う、出かけて社会に貢献することを目指し

山口法律会計事務所

弁護士 山口 健一

(法・昭和49年卒)

事務所 〒530-0047

大阪市北区西天満1丁目7番20号

JIN・ORIXビル6階

TEL. 06-6361-3234 FAX. 06-6361-0096

E-mail office@yamaguchi-law.jp

URL http://www.yamaguchi-law.jp

ています。

——最後に、市大の現役学生にメッセージを一言お願いします。

山口 市大はアットホームさが誇りだと思っています。それも含めた市大の良い所をどう吸収するかが大事です。また、先輩や友達とのつながりを大切にしてください。できれば市大のロースクール（法科大学院）に入って、法律家になる人が増えてほしいと思っています。

(インタビュー：学生記者・丹下舜平(法学部2年生))